

言葉のハイデガー的射程：金子みすゞ・東直子・矢原繁長の三つの詩歌作品に即して

著者	斧谷 彌守一
雑誌名	甲南大學紀要.文学編
巻	163
ページ	235-241
発行年	2013-03-30
URL	http://doi.org/10.14990/00001096

言葉のハイデガー的射程

——金子みすゞ・東直子・矢原繁長の三つの詩歌作品に即して——

斧 谷 彌守一

中期・後期ハイデガーは、ヘルダーリン、トラークル、ゲオルゲ等の詩を読み解きつつ、言葉の本質について深く思索した。文学の立場から見れば、一見強引とも思える読み方をする場合もある。そのような場合も含めて、ハイデガーの読みが、詩の蔵する隠された秘密に分け入っていると感じさせることが多いのも事実だ。

この小論は、私が比較的最近、身近に接し、つましやかな詩や短歌ではあるが、真のポエジーがあると感じた三つの詩歌を取り上げ、その真のポエジーと思えるものをハイデガーの言語論で解き明かすことができるかどうかを検証してみようとするものである。

まず、ハイデガーの言語論を一瞥しておこう。ここでは、主としてハイデガーの講演『言葉』を取り上げる（この講演についてはかつて二つの拙論で論じたことがあるが、その論述に全体的な見通しが不足していた。本論はかつての拙論と重複する個所があることをお断りしておく¹⁾）。ハイデガーはそこで、言葉のことを「Unter-Schied」と呼ぶ。この語は、通常「Unterschied」と綴られ、「相違、差異、違い」という意味の日常語である。

我々は通常、言葉は概念であり、その言葉の概念は辞書に記載されている概念規定のことであると思込んでいる。辞書による概念規定は、まさしく他の語との「相違、差異、違い」を明らかにすることである。例えば、後に取り上げる「魚」（さかな・うお）は、『新明解国語辞典第七版』では、「水中にすみ、ひれと うろこが有って、よく泳ぐ脊椎動物。食用になるものが多い」と定義されている。「魚」の定義中の「水中にすむ」「よく泳ぐ」「食用」等の特徴、この辞書にはないが、「流線型」という形状は、例えば、「いか」にも共通している。「いか」は同じ辞書で「海にすむ軟体動物の一つ。十本の足が口のまわりに有る。敵に会うと、腹の中の墨をふき出して逃げる。食用」と定義されている。この「いか」の定義には、「魚」の定義中の「ひれと うろこが有る」、「脊椎動物」という部分が欠けている。つまり、上記の「魚」の定義

は、「魚」と「いか」等との「相違、差異、違い」を明らかにしていることになる。

ハイデガーはこの「Unterschied」という語を敢えて「Unter-Schied」と綴り、「Unter（間）」＋「Schied（分離・分かれ）」という原義に遡り、次のように述べる——

世界と物の内密性〔親密性〕（Innigkeit）は、間の分かれ（Schied des Zwischen）の中で本質現成し（wesen）、分かれ-目（Unter-Schied）の中で本質現成する。分かれ-目という語は、今、[Unterschied 相違という] 通常の慣用的用法から引き離されることになる。「分かれ-目」という語が今名指すものは、多種多様な種類の相違に対する類概念ではない。今名指された分かれ-目は、この一者（dieser Eine）としてのみ存在する。この分かれ-目は、唯一的（einzig）である²⁾。

「[Unterschied 相違という] 通常の慣用的用法」が「多種多様な種類の相違に対する類概念」であるのは、鯖、鯛、秋刀魚、鯛等の「多種多様な種類の相違」を示す物たちがすべて「魚」という「類概念」に属するという場合である。

ハイデガーの考える「分かれ-目（Unter-Schied）」は、二つのものが分かれつつ出会う場所・間・中心を意味している。「分かれ-目」という訳語の「目」は、「間」の意で用いられている。『日本国語大辞典』（小学館）における「目」の語義記述の内、く六 空間的、時間的な切れめ。二つの物、あるいは二つの事態の区切りや接点。[…]「切れ目」「切り目」「分け目」「折り目」「裂け目」「境目」「合わせ目」「繋ぎ目」「綴じ目」「くけ目」など」という場合がこの「目」に当たる。

では、「分かれ-目」の「目」という「間」（接点）において、何と何が出会うのか——

分かれ-目は、世界が世界化する〔世界として本質

現成する] ことの中へと世界を、物たちが物化する [物として本質現成する] ことの中へと物たちを、月満ちるまで身に宿し運ぶ (austragen)³⁾。

「分かれ-目」としての言葉が「月満ちるまで身に宿し運ぶ」という言い方は、決して所謂「言語起源論」を目しているのではない。この文は、「分かれ-目」(言葉)が世界と物を正確に指示することができるまで時間をかけて記号のあり様を厳密化し熟成させる、というようなことを言っているのでもない。「分かれ-目」の「目」(間)において世界と物が出会うようなのだが、その出会い方は、実体としての世界と実体としての物が意図的に、あるいは、出会い頭に出会うようなものではない。言われているのは、「分かれ-目」としての言葉が、世界と物を自らの胎内へ取り込み、世界の世界化、物の物化という運動が始動するところまで世界と物を孕み続ける、ということである。「分かれ-目」において懐胎される、運動としての世界、運動としての物とは、どのようなものであるのか――

世界と物にとっての分かれ-目は、世界を身ぶりによって産み出すこと (das Gebärden) の中へと物たちを自己発現させ [性起させ] (ereignen)、物たちを惜しみなく与えること (das Gönnen) の中へと世界を自己発現させる [性起させる]⁴⁾。

世界と物との間としての「分かれ-目」において、物の側では運動としての物が「世界を身ぶりによって産み出す」のであり、世界の側では運動としての世界が「物たちを惜しみなく与える」のである。世界と物の自己発現は、互いが互いの産出を助け合う相互産出の関係にあるようだ。そのような相互産出の関係が世界と物の内密性 [親密性] と呼ばれている。

物たちは、物化することによって、世界を月満ちるまで身に宿し運ぶ (austragen)。私たちの [ドイツ語の] 古語は、月満ちるまで身に宿し運ぶことを、bern, bären と名づけており、そこから「gebären」(産み出す)、「Gebärde」(身ぶり)という語が由来している。物化しつつ [物として本質現成しつつ]、物たちは、物である。物化しつつ、物たちは、世界を身ぶりによって産み出す (gebärden)⁵⁾。

――「物たちは、世界を身ぶりによって産み出す」と

言われる。言葉は、物が物化する運動、物が世界を孕むという運動を懐胎し、分娩するという産みの苦しみを味わうが、そのような産みの苦しみの身ぶりだけが名指されているのではない。それぞれの語は、それぞれの語の世界を懐胎し産み出すという、それぞれの語特有の身ぶりを示すということが含意されている。

世界が「物たちを惜しみなく与える」という表現は、世界の多産性、世界が多種多様な物質・生命を豊かに産出するというようなことを目しているのではない。この表現は別の個所では次のように言われている――

世界は、物たちに、その物たちが本質現成することを惜しみなく与える (ihr Wesen gönnen)⁶⁾。

「分かれ-目」としての言葉において、一方の側で物が物化するという運動が始動すると同時に、他方の側では世界が世界化するという運動が始動し、「その物たちが本質現成することを惜しみなく与える」ということが生起する。世界が世界化するとは、世界に関する固定観念がほどけ、物質的・概念的に固定化・分節化されていた凝固が解け、世界遊動空間が出現し、世界の孕む多様な要素が収集可能となることである。他の個所では、「言うこと (das Sagen) は、世界を物たちに信頼して委ね (zutrauen)⁷⁾」と言われている。世界は世界の様々な要素を物に信頼して委ね、物の産出行為が豊饒になるべく助ける。物が物化するという運動が生じるとき、物は、世界から自らに「信頼して委ね」られた世界の様々な要素を集め、孕みつつ、「世界を身ぶりによって産み出す」という産出行為を行うのである。

分かれ-目は、それが世界と物をそれらの自性 (ihr Eigenes) の中へと測り-出す (er-messen) 限りにおいて、次元そのもの (die Dimension) である。分かれ-目が測り-出すことが初めて、世界と物の〈互いから-分かれ合い、互いに-向き合う動き〉 (das Aus- und Zu-einander) を開く。そのような開くことは、ここで分かれ-目が世界と物を隈なく測る (durch-messen) やり方である。分かれ-目は、世界と物たちにとっての中心として、それらの本質現成 (Wesen) の尺度 (Maß) を測り定める (vermessen)⁸⁾。

「分かれ-目」としての言葉が「世界と物を隈なく測る」ことによって、世界と物の相互運動を始動させ、物の物化の運動が世界の世界化の運動を隈なく探知し、

世界の要素を物の中に集める。このように物が世界の世界化の様相を隅なく探知し、世界の要素を集めることが、「隈なく測る」「測り定める」と呼ばれている。物が世界の要素を集めることは、同時に、世界の隠された要素が探知され、世界の豊かな広がり「隈なく測ら」れ、「測り定め」られることでもある。このような物の物化と世界の世界化の相互産出が「分かれ-目」の「目」という中心において生起するのである。

[...] この互いに向き合う動きの単一性 (Einheit) を分かれ-目が月満ちるまで身に宿し運ぶ⁹⁾。

「分かれ-目」において生起する、世界が世界化する運動と物が物化する運動は、二つの別箇の運動が事後的に一つに束ねられたものではなく、同時に相互産出的に「単一性」として生起する。このような物化と世界化の相互産出的な「単一性」を示す唯一の「次元」が言葉という「次元」なのである。この「次元」はその都度運動によって立ち上ってくる「次元」であって、固定化・永遠化された「次元」ではない。

以下、「魚」「ひらきゆく」「ゆらり」という語たちがそれぞれ独自の身ぶり・挙措によって「世界」を産み出す様を見てみよう。

* 「魚」

ここで、金子みすゞの「おさかな」という詩を読んでもみよう――

おさかな 金子みすゞ

海の魚はかわいそう。

お米は人につくられる、
牛は牧場で飼われてる、
鯉もお池で麩を貰う。

けれども海のおさかなは、
なんにも世話にならないし、
いたずら一つしないのに、
こうして私に食べられる。

ほんとに魚はかわいそう¹⁰⁾。

まず、ハイデガーの言語論に即して、この詩の最大のキーワードである「魚」という語について確認しておこう。「魚」という語は、「魚」という物と「魚」の世界との中心である。「魚」という語はもはや、単に「魚」という類概念を表わすだけでなく、「魚」という視点から「魚」の世界を集めることになる。我々が物質としての魚を眺めているとき、我々はその魚を「魚」という語によって「魚」と認知するだけでなく、例えば、魚をおいしくいただいた時のことを思い出したり、魚の鱗の感触が蘇ったり、『老人と海』の読後感を想起したり、釣りの楽しい体験を思い出したり、魚の泳いでいた川や海に思いを馳せたりする。そのような思いは、物質としての魚の中で生起しているのではなく、「魚」という物と「魚」という世界との「分かれ-目」である「魚」という語のなかで生起している。

この詩は、元々童謡であり、複雑な結構を有するわけでもなく、表面的には単純平明であるが、骨太な本物の詩情に貫かれていることが感得される。その詩情はどこに存するのか。そのことを考えるために、ここでハイデガーから更に一つの補助線を引くことにする――

手で掴むことのできる近くにはない物たちに我々が関係するときにも、我々はその物たち自体の許に留まっている。我々は遠くの物たちを単に――教わるように――内面的に表象し、その結果、遠くの物たちの代理として我々の内面や頭の中をそれらの遠くの物たちの表象 (Vorstellungen) がただ通り過ぎていくのではない。我々が今――我々全員が――この場からハイデルベルクにある古い橋のことを思うとき、かの場所へと思いを馳せることは、ここに居合わせる人たちにおける単なる体験ではなく、むしろ、名指された橋への我々の思いの本質に属しているのは、この思うことがそれ自体においてかの場所への遠さを立ったまま通り抜ける [耐え通す] (durchstehen) ということである。我々はこの場からあちらの橋の許に在るのであり、例えば、我々の意識内のある表象内容の許に在るのではない。¹¹⁾

言葉とは何の関係もない論述のようだが、実は、そうではない。遠くの橋を思うとき、我々は通常、その橋の表象を思い浮かべていると考えるが、ハイデガーは、そのようなとき、一見奇矯にも、我々は「あちらの橋の許に在る」と言う。「この思うことがそれ自体においてかの場所への遠さを立ったまま通り抜ける

〔耐え通す〕ということ〕が可能なのはなぜなのか。我々が存在する場所が単なる物理的空間ではなく、言葉という空間であるからである。「橋」という語は、「橋」という物が物化する場所であり、同時に、「橋」の世界が世界化する場所である。「橋」の世界が世界化する「橋」という語においては、遠くにある橋も「橋」の世界の中に、「橋」という語の射程内にある。遠くにある橋まで物理的に移動することなく、「橋」という語は「橋」の世界を通り抜け、隈なく測るのである。そのような場合、「橋」という語は「橋」の世界を身ぶりによって産み出している。

一挙に「立ったまま通り抜け」られる場所は、言葉が立ち上げた「世界」である。「海」は、魚の生息する物理的場所ではなく、「魚」という語の「世界」である。だからこそ、私に食べられる「魚」から、海の「魚」まで、一挙に「立ったまま通り抜け」られるのである。

「海の魚はかわいそう」というフレーズは、魚は人間の世話にならないのに、人間の世話になって育つ米や牛や鯉と同じように人間に食べられるのは魚に取って不公平で気の毒だ、と言っているように表面的には見える。だが、「ほんとに魚はかわいそう」という最終行に至ると、そのような不公平への同情を超えるレベルの「かわいそう」が出現しているのが感じられる。

石井直人は「こうして私に食べられる」というフレーズについて、次のような指摘をしている――

もしも、たんに「かうしてひとに食べられる」とあったならば、抽象的な道徳をのべた印象にとどまっただろう。「かうして私に食べられる」とリズムを崩しさえして、「私」を呼び出したところが物凄い。「かうして」という語も生々しい。いきなり、ぬつと、金子みすゞとおぼしき女性がうつむいて食卓の魚をじっと見つめる姿が現われる¹²⁾。

「こうして私に食べられる」ことによって、「魚」の世界に「私」が包含される。ちっぽけな「私」は、海の魚を食べることによって、単においしく魚をいただく「私」から、一挙に、魚の住む広大な海へと「立ったまま通り抜ける」のである。冒頭の「海の魚はかわいそう」では、米・牛・鯉が人間に育てられるために人間の身近に居場所を得ているのに対して、魚は「海」という人間から遠い場所に居場所を得ている、という生息地の違い、それに起因する生態の違いが述べられているに過ぎないように思われたのだが、「こうして

私に食べられる」によって、単なる生息地・生態の違いを超えたレベルが出現する。「こうして私に食べられる」ように、「海の魚」によって他のプランクトン・海藻・小魚たちが「食べられる」。「こうして私に食べられる」で、否応もなく食物連鎖の一環に組み込まれ殺生を行わざるを得ない人間の姿がクローズアップされることによって、「魚」の世界が一気に広がると共に、そのように広がった「魚」の世界を孕むことによって「魚」という物の物化が豊饒になる。最終行の「ほんとに魚はかわいそう」は、もはや、他の生物と対比した場合の不公平への同情、単に博愛的な「かわいそう」などではなく、食物連鎖の一環であらざるを得ない生物の背負う酷薄さ、生きることのある種の痛ましさを「私」が魚と共有している事態であるように思われる。この詩が見据えているある種の残酷さこそ、この詩に感じられるポエジーの骨太さの淵源であるだろう。最終行において、「かわいそう」という語は、生き物が生きることの痛ましさの境地まで、一挙に「立ったまま通り抜け」ていく。

ハイデガーにとって、ロゴス (λόγος) は言葉であり、レゲイン (Λέγειν) という動詞と同語源である――

レゲイン (Λέγειν) は置く (legen) ことである。置くことは、一緒に-現前するもの (das beisammen-Anwesende) を自らの中に集めて前にあら-しめること (in sich gesammeltes vorliegen-Lassen) である¹³⁾。

――ここで言われている「レゲイン」「置く (legen) こと」は「言う (sagen) こと」の謂である。

「魚」という語は、米・牛・鯉から区別される類概念としての「魚」から、「こうして私に食べられる」「魚」を介して、海で泳ぎつつ他の生物を食べている「魚」まで、一挙に「立ったまま通り抜け」ていく。この「魚」は言葉としての「魚」であり、物と世界の内密性〔親密性〕という分かれ-目の中へと呼ばれた「魚」、つまり、「魚」という物と「魚」の世界との内密性〔親密性〕としての言葉である。「魚」という語は、「こうして私に食べられる」「魚」の現前と、海で泳ぎつつ他の生物を食べている「魚」の現前とを、一緒に-現前するものとして自らの中に集め、この詩の中で前にあらしめている。こうして、「魚」という語は「魚」の世界に「海」「かわいそう」「わたし」「食

べる」という要素を集めつつ、「魚」の世界を測り定め、「魚」の世界を「身ぶりによって産み出し」たのである。

＊「ひらきゆく」

次に、東直子の短歌を読んでみよう――

日当りの順に花がひらきゆく小さな皿の割れゆくように¹⁴⁾

「小さな皿の割れゆくように」は直喩だが、単に「日当りの順に花がひらきゆく」様を比喩的に形容しようとする修辞ではない。「日当りの順に花がひらきゆく」様が喚起した直接的なイメージである。

日当たりとは日が当ることである。日が順に開花直前の蕾（花）に当り、蕾をたたいていく。日差しが蕾をたたくことが、開花への刺激・引き金となる。日が順に花をたたいていく様が、順に「小さな皿の割れゆく」イメージを直接に喚起する。日差しが花をたたき、蕾が割れて花がぽっかりと開く様が、「小さな皿の割れゆく」イメージ、物が壊れていくイメージを喚起するのである。開花は、自らの生命の頂点にあって、自らの生命の終焉を予期し、次世代へと自らの生命を託す行為である。陶磁器であるはずの小さな皿が割れることは、取り返しもなく壊れてしまう一回性の出来事であり、生命の糧である食物をもはや載せることはできなくなる。開花とは、自らの命の終焉を賭して次世代を産み出すための捨て身の一時的な行為であり、生命の絶頂であるかのように見える開花は、実は、次世代の生命の糧として自らを差し出す行為である。前世代を糧として呑み込む深淵から次世代が生成する。

ハイデガー的に言えば、「日当りの順に花がひらきゆく」様が現前したのと同時に、「小さな皿の割れゆく」様が現前したのであり、この短歌は、両者を一緒に現前するものとして自らの中に集め、この短歌の中で前にあらしめている。

下二句の「小さな皿の割れゆくように」が割れる小さな音を呼び起こすので、上三句「日当りの順に花がひらきゆく」も小さな音を伴っているように思われる（むしろ、上三句で感知される微かな音が、仮想の音源を名指す下二句を喚び出したのかもしれない）。「ひらく」はここで直接には花が開くことを目しているが、捨て身の一時的な行為という点を勘案すると、生命が避けがたく落ちて行かざるを得ない深淵が「ひらく」

ことを示唆しているようだ。生命の開花である「花がひらきゆく」から、自らの有用性の終焉である「小さな皿の割れゆく」まで、一挙に「立ったまま通り抜け」られていく。つまり、「ひらく」という語は、花が開くから、深淵が開くまで、「立ったまま通り抜け」つつ、「ひらく」の世界を測り定め、「ひらく」の世界を身振りによって産み出したのである。

「ひらきゆく」という語は、「ひらきゆく」という場所に「立ったまま」、「割れゆく」という語を呼び出し、開花→崩壊・深淵→次世代の産出というプロセスを「通り抜け」、花が「ひらきゆく」現象と、花が「ひらきゆく」世界の「本質現成の尺度を測り定める」。「ひらきゆく」という語の本来的な「尺度」、本来的な射程が現出したのである。

＊「ゆらり」

最後に矢原繁長の詩「種子」を読む――

種子 矢原繁長

廂から
剥がれかけた
トタン屋根がゆらり

雨と太陽の粒子に
抗い続けた半世紀
コスモスの花卉がゆらり

酸化した鉄は
質量を奪われ
種子を受け入れる

もう職人の任務は終わった

彼は
川沿いの小道を
ゆらりと歩く¹⁵⁾

「ゆらり」は、「ゆらゆら」の軽く繰り返し揺れる様とは違う。「ゆらり」という擬態語は、『新明解国語辞典第七版』によれば、「①一瞬大きく揺れる様子。②ゆっくりとからだを動かす様子」を表す。第一連「廂から／剥がれかけた／トタン屋根がゆらり」は、本来は室内を日差し・雨風から守る役目をするトタン屋根

が剥がれかけ、めくれ、ゆらりと揺れる様を描く。第二連の「雨と太陽の粒子に／抗い続けた半世紀」によって、このトタン屋根が五十年間にわたって日差し・雨風に晒され続けたことが分かる。亜鉛メッキを施した鋼板であるトタンは金属であり、金属は一般に有機的な生命を寄せ付けないものである（有機体の組成のレベルではそうではないが）。しかし、このトタン屋根は、五十年間にわたって日差し・雨風に晒され続けた結果、剥がれかけ、めくれ、有機的な生命の入り込む間隙・余地を露出させる。その間隙・余地にコスモスの種子が入り込み、花を咲かせる——「コスモスの花卉がゆらり」（「コスモス」だから、宇宙がかすかに揺らぐという運動が生起しているようにも感じられる）。

「トタン屋根がゆらり」と「コスモスの花卉がゆらり」の「ゆらり」は、一方では、本来生命をはねつける金属が自らとは異質な間隙・余地を「ゆらり」と出現させ、他方では、その同じ間隙・余地に、金属とは異質な花の生命が入り込み、「ゆらり」と揺れるという呼応関係を言い表している。二つの「ゆらり」が、同じ場所で生起している表裏一体の現象を名指しているのだ。「ゆらり」という擬態語を使うことによって、五十年間の時間の重みを背負った時間・場所が「ゆらり」と一瞬大きく揺らぎ、その時間・場所の性質が「ゆらり」と一瞬大きく揺らぐ。「酸化した鉄は／質量を奪われ」によって、金属製の屋根の末端が金属たる所以を喪失したことが描写される（相変わらず屋根全体から見れば金属部分の物質的な質量は大きいだろうが、質的には種子に負ける）。

「ゆらり」ではなく、「ぐらり」と言われる場合は、50年間の時間の重みが一挙に崩壊しそうになり、金属から花へ、という継起関係の生起する余裕・遊びが失われるように思われる。「ゆらり」は、世界と物の本質現成の広がり・尺度を測り定めている、つまり、世界の継続・断絶・崩壊を、あるべき場所へと測り定めている。ここでは、「ゆらり」が時間の移り行きを50年単位のゆったりとした動きへと測り定め、崩壊を差し当り遠くのところへと測り定めている。「ゆらり」という、遊びのある語であることによって、金属から花へ、という継起関係を生起させる余裕が生じているのである。

五十年間にわたって日差し・雨風に晒され、剥がれかけ、めくれた「トタン屋根がゆらり」も、そのめくれた場所に「コスモスの花卉がゆらり」も、自然の摂理が惹き起こした現象である。トタン屋根もコスモスの花卉も、自らを自然の摂理に任せている。「彼」も

自然の中の一現象と化す。「彼」が「ゆらりと歩く」様は、上の二つの「ゆらり」の余韻・残響に包まれる。「職人の任務は終わった」「彼」の後ろ姿は寂しそうだが、自然の流れに身を任せた寛ぎをも感じさせる。「川沿いの小道を／ゆらりと歩く」は、川の流れと時間の流れに身を任せてゆったり、ゆっくり歩いている姿を現出させる。振り返れば、雨と太陽は、金属と植物と彼に等し並に降り注いできたのだった。

「ゆらり」という言葉は、「トタン屋根がゆらり」、「コスモスの花卉がゆらり」、「彼」が「ゆらりと歩く」という三つの一緒に—現前するものを自らの中に集め、この詩の中で前にあらしめている。ここでは、置くこととしてのレゲイン、言うこととしてのレゲインが生起している。「ゆらり」という言葉は、「ゆらり」の世界の広がりや測り定め、「ゆらり」の世界を身振りによって産み出している。

死すべきものたちが、分かれ-目の中から分かれ-目の中へと呼ばれて、自分たちの側で語る様式〔調べ〕(Weise)は、応答すること〔聞き取って語ること〕(Entsprechen)である。死すべきものたちが語ることは、すべてに先立って、命令系統に耳を傾けていた(auf das Geheiß gehört haben)のでなければならぬ——そのような命令系統として、分かれ-目の静けさが、世界と物たちを分かれ-目の一様性〔一重性〕の裂け目の中へと呼ぶのである。死すべきものたちが語ることのすべての語は、そのような傾聴(Gehör)の中から、そのような傾聴として語る。¹⁶⁾

金子みすゞの「こうして私に^{わたし}食べられる。/ほんとに魚はかわいそう」において、「魚」をじっと見つめつつ「魚」という語の射程を聞き取ろうとする姿勢。東直子の「日当りの順に花がひらきゆく」様を凝視しつつ、「花がひらきゆく」という言葉が「小さな皿の割れゆく」まで「立ったまま通り抜ける」のを見据える様子。矢原繁長の「剥がれかけた/トタン屋根」をじっと見上げつつ、「トタン屋根がゆらり」という言葉が「コスモスの花卉がゆらり」を経て「彼」が「ゆらりと歩く」まで辿り着いていくのを見届ける様子。これらの姿勢は、ハイデガーの言う「そのような傾聴(Gehör)の中から、そのような傾聴として語る」という姿勢そのものではないだろうか。これら三つの詩歌からは、そのような傾聴の中から応答する様式〔調べ〕が聞こえてくる。これら三つの詩歌は、言葉とい

う「命令系統に耳を傾け」たのである。我々が、これら三つの詩歌に真のポエジーがある、と感じた所以である。

注

- 1) 「呼ぶこととしての言葉——ハイデガー『言葉』を読む（Ⅰ）」1998, 「甲南大学紀要・文学編」106, S.1-16; 「分かれ-目としての言葉——ハイデガー『言葉』を読む（Ⅱ）」1999, 「甲南大学紀要・文学編」110, S.17-50; 『言葉の二十世紀』ちくま学芸文庫2001, 「文庫版へのあとがき」。
- 2) Heidegger, Martin: *Die Sprache*, in: *GA12*, S.22; *US*, S.25
- 3) Heidegger: *Die Sprache*, in: *GA12*, S.22; *US*, S.25
- 4) Heidegger: *Die Sprache*, in: *GA12*, S.22; *US*, S.25
- 5) Heidegger: *Die Sprache*, in: *GA12*, S.19; *US*, S.22
- 6) Heidegger: *Die Sprache*, in: *GA12*, S.21; *US*, S.24
- 7) Heidegger: *Die Sprache*, in: *GA12*, S.21; *US*, S.24
- 8) Heidegger: *Die Sprache*, in: *GA12*, S.23; *US*, S.25f.
- 9) Heidegger: *Die Sprache*, in: *GA12*, S.22; *US*, S.25
- 10) 『金子みすゞ童謡全集①美しい町・上』JULA 出版局2003年, S.12f.
- 11) Heidegger, Martin: *Bauen Wohnen Denken*, in: *GA7*, S.159; *VA*, S.151
- 12) 『文藝別冊 金子みすゞ』河出書房新社2011, S.168
- 13) Heidegger, Martin: *Logos (Heraklit, Fragment 50)*, in: *GA7*, S.217; *VA*, S.203
- 14) 東直子『十階 短歌日記2007』フランス堂2010, S. 87
- 15) 矢原繁長詩集『輪郭のない時刻』七月堂2012, S. 12f.
- 16) Heidegger: *Die Sprache*, in: *GA12*, S.29; *US*, S. 31f.